Case_07

サポーター、というライフスタイル

＃県立青少年センター人材育成推進事業
「ステップアップキャラバン」／
＃神奈川県子ども会連絡協議会

イントロダクション

子どもたちを地域で支える、「子ども会」をご存知ですか。

一般には小学生が参加するもので、お祭りやキャンプを楽しむ団体、と思われていますが、実は参加者の一部にはその後も中学校入学後にジュニア・リーダー（JL）、大学生年代になりユース・リーダー（YL）として、子どもの支援者、指導者に育っていく若者もいます（市町村によって名称や組織体系が異なります）。

県立青少年センターでは、主にそんなYLのスキルアップを目指して「ステップアップキャラバン」という事業を実施し、県内各地の子ども・若者向けのイベントに派遣したり、支援・指導者のネットワーク化の促進を図ったりしており、将来的に地域で活躍する方々となることを期待しています。

と言っても、彼らのその活動はほぼ手弁当。通称「ユースサポーター（YS）」として各地の事業で活躍する彼らは、貴重な休日にどんな思いでボランティアに臨むのか。事例とともに、彼らの地域に向けるまなざしと声をお届けします。

（上）2022年度のユースサポーターのみなさん
（中）バルーンアート制作の一コマ。派遣依頼の内容で１・２を争う
（左下）大和市事業で。ゆるキャラ「ヤマトン」も実は…！

活動事例（2024年度）

伊勢原市子ども会育成会連絡協議会「夏の指導者研修会」の講師・進行

日にち　８月18日(日)
会　場　伊勢原市民文化会館
参加者　計25名
（内訳）ユースサポーター２名、子ども会育成者及び児童・幼児等23名
概　要
　ゲームアクティビティとバルーンアートの講師として活動。時間の制約がある中でプログラムを工夫し、当日はタイムマネジメントをしながら参加者の満足度が高くなるように進行しました。特にアクティビティを利用して進めたアイスブレイキングでは、参加者のレベルに合わせながら臨機応変に実施しました。

（参加者より）
「前半の身体を使った遊びと後半のバルーンアート、頭をスッキリさせてスタートできました。バルーンアートは難しいイメージで作成は初めてでしたが、思ったより色々楽しかったです」
「とても親しみやすい導入でわかりやすい説明でした。実践しながら、子ども達も憧れを抱いてくれるといいなと思いました」
「イベントを企画する際『１年生でも楽しむことができるか』を大事に考えていますが、今回行った手遊びはアイスブレイクとしておこなえるなと思いました」

大和市子ども会連絡協議会事業「かるた大会」の運営補助

日にち　９月７日(土)
会　場　大和市スポーツセンター
参加者　計128名（内訳）ユースサポーター４名、児童等124名
概　要
　大和市の児童を対象に実施している、大和にちなんだかるたを用いて行うかるた大会の運営を支援。開会中は前面には出ず、主催する地元の子ども会に配慮し、運営のサポートに徹した。また会場準備や後片付けも含め、それぞれが柔軟によく動いていました。

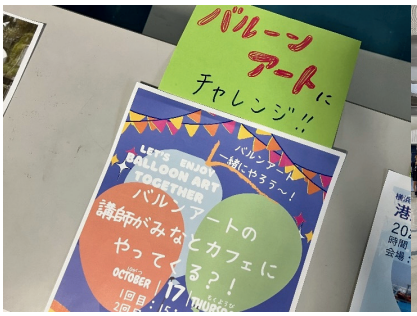
（大和市職員より）
「地元子ども会に対し、常にサポートに徹する姿を拝見しました。必要な時にアドバイスを与え、遠くから見守ってくださり、心強く感じました。日頃から意識を高く持ち活動なさっていることが伝わりました。また、主体的に市子連の準備を手伝ってくださり大変助かりました」

（上）白熱したバトルが繰り広げられる！
（左）大和市内のみんなとパシャリ
（下）ユースサポーターによるデモンストレーション

よこはまユース事業　横浜市立みなと総合高校内居場所カフェ「みなとカフェ」でのバルーンアートワークショップの企画・運営

日にち　10月17日(木)
会　場　横浜市立みなと総合高等学校
参加者　計182名（内訳）ユースサポーター２名、生徒180名（随時開催）他
概　要
（公財）よこはまユースが横浜市内３校で展開する校内居場所カフェのひとつ、「みなとカフェ」は月に一度開催し、地域団体をはじめとする様々な支援者が多様なワークショップを展開しています。
今回はユースサポーターのスキルを生かし、初心者から経験者まで楽しめるバルーンアートのワークショップを実施。運営にあたっては周囲に目を配り、準備、片付けにも積極的に取り組みました。アイスブレイキングができない環境の中でも初対面の参加者に対し適切に距離を縮め、楽しい空間を演出していました。

（よこはまユース職員より）
「『普段体験できないバルーンアートができて楽しかった！』、『お姉さんが優しく教えてくれて、上手にできた』、『またやってみたい！』と高校生たちが話していたと共有いただいています。年齢の近い大学生のお二人が講師としてワークショップを開催してくださったのが、生徒たちにとっては新鮮だったと思います」



（左）今回の目玉として取り上げていただきました
（中）オープンスペースのカフェは人の波
（右）レベルに応じた難易度にチャレンジします

綾瀬市子ども会育成連絡協議会事業「綾瀬市少年リーダー研修会」の運営補助

日にち　10月26日(土)、27日(日)
会　場　厚木市七沢自然ふれあいセンター
参加者　計50名（内訳）ユースサポーター４名、児童30名、育成者等16名
概　要
綾瀬市子ども会育成連絡協議会が実施している少年リーダー研修会について、運営するJLC of あやせ（綾瀬市域のジュニア・リーダーズクラブ）の運営サポートとして、特に子どもたちの班に同行する役割などを担当。レクリエーションゲーム、野外炊事、キャンプファイヤー等を指導する場面では、周りを見ながら協力をし、次の動きを考えながらお互いに働きかけることを心掛けていました。

（綾瀬市職員より）
「綾瀬市ジュニア・リーダーの人員不足のためユースサポーターのお手伝いをいただきありがとうございました。大変助かりました。今後もよろしくお願いいたします」

茅ヶ崎市事業「第１回リーダー教室（秋）」の講師・進行

日にち　11月17日(日)
会　場　茅ヶ崎市役所
参加者　計23名（内訳）ユースサポーター２名、児童等21名
概　要
茅ヶ崎市では、子ども会や、地域・学校での活動の中で、小学校中学年から高学年の子どもたちがリーダーシップを発揮し、中心となって活動していくことをサポートするためリーダー教室を実施しています。参加対象は市内在住の小学３～６年生で、子ども会入会者に限定することなく、幅広く募集をすることが特徴です。
第１回リーダー教室（秋）は「楽しく体験、楽しく創作」がテーマとなっており、コミュニケーション能力や創造力、協力する力を身につけ、リーダーシップを引き出したいというオーダーを受け、アイスブレイキング体験やバルーンアート体験を実施。当日ははじめましての小学生もいる中、講師２人のあたたかい雰囲気づくりによって和気あいあいと進めることができ、小学生の「やってみたい！」を引き出す研修にすることができました。

（茅ヶ崎市職員より）
「ユース・リーダーさんの暖かい人柄と丁寧な対応により、子どもたちは楽しく気持ちよく学ぶことができたと思います。この教室の目的（コミュニケーション能力や創造力、協力する力を身につけリーダーシップを引き出す）をしっかりと汲み取っていただき、進行していただいて大変感謝しております」

地域の子どもと歩む

ユースサポーターが語る ボランティア活動への思い

ユースサポーターとして各地の現場に赴く若者には、県内で生まれ育ったという共通点があります。そんな彼らに、ボランティアへの思いや地域、地元への思いを尋ね、持続可能な活動について一緒に考えました。

回答項目

① ボランティアのやりがい
② ボランティアを続けるモチベーション
③ 地元や神奈川県への思い
④ 子ども会への思い

① 子どもたちの笑顔がみられることです。
自分は誰かのために何かすることが好きなので、素敵な笑顔が見られることはボランティアのやりがいです。

② 子どもたちが体験を通して見せてくれる色々な表情を見られることです。
最初の緊張していて不安だな…という顔から、だんだんとほぐれていって、「たのしい！」という顔になる変化は見ていて楽しいし、嬉しくなりますね。

③ 地元の子ども会は「小学校に入学したらみんな会員」という方針でした。そこで地元の方と関わりながら学生生活を過ごしてきました。そこで得た経験は自分の糧になっています。
また、厚木は周辺環境のバランスが良く、ちょっと都会、ちょっと田舎みたいな感じがとても好きです。遠出しなくても自然体験ができるのは恵まれていたな～と感じます。今は地元を離れてしまっていますが、先々自分の仕事（農業）がなんらかの形で地元に還元できれば恩返しになるのかなと思います。

④ 現状、子ども会は会員数が減少傾向にありますが、子ども会の良いところは残っています。子どもたちには、子ども会で様々な体験を通して異なる年齢の人と交流したり、普段はできない体験をすることで色々な楽しさを感じたりしてほしいです。
そのきっかけ作りや架け橋として、これからも何らかの形で関われれば良いと思っています。

（厚木市出身　つっちー）

① 子どもたちの笑顔が見られること、誰かのためになることができていると実感できること

② 楽しいから。
ボランティアを続けていく中で、様々な経験を積むことで得られるものがたくさんある。けれど、それはあくまで副産物のように思っていて、子どもたちや接した人が笑顔になってくれることで、自分も笑顔になれるし、楽しい・嬉しいと感じることがモチベーションにつながっていると思う。

③ 地元の子ども会がなくなってしまう、減少してしまうことに寂しさを感じるとともに、自分にもっとできることはないのかという思いがある。
地元での活動自体は現在していないが、神奈川県内の活動に関わっていることが神奈川県のためになり、ひいては地元のためになっていると嬉しいなと思う。

④ 地元の子ども会がなくなってしまい、寂しく感じるし悲しい。
関東のほかの地域でも、子ども会活動が縮小しているということを聞き、このままではさらに子ども会活動が縮小してしまうことに危機感を覚えている。
子ども会活動がなくなってしまうことで、子どもたちがそこで得られたはずの経験や交流の輪が途絶えてしまうことはとても残念に思う。だからこそ、自分（たち）が活動を続けることで子ども会活動を活発にしていくことが大切なのではないかと思う。

（海老名市出身　ちか）

① 参加者が「楽しかった」と言う、笑顔が見られた時。
出会った人とひとつのものを創り上げられた時。

② 参加者の笑顔や、「たのしかった」、「また遊ぼうね」と言った言葉。
新しい仲間との出会い。

③ 自身がジュニアリーダーとして活動していた際に、サポートしていただいた方や今までお世話になってきた方々に、その分を活動を通して返していきたい。

④ 自分の住んでいた地域には子ども会が無かったが、ジュニアリーダーに所属したことによって、学校外で居場所を作ることができた。
また、その中で人前で話すこと、会の運営や企画の立案など、様々な経験をすることができ、今の私の強みになっていると感じることも多い。

（鎌倉市出身　ぞい）

① 関わった人の、最初と最後の表情の変化が見られた時にやりがいを感じます。
自分がその人に対して満足のいく結果を出せたのだと思うと、やってよかったな、間違ってなかったなと思い、安心感・満足感を得ています。

② ステップアップキャラバンは色々な現場で実施しますが、個人的には子ども会関係の活動に出ることが多いです。子どもたちの満足感のある顔が見られたらまた次の機会に同じことをやりたいなと思う、その繰り返しです。
同じ団体にいる仲間との雰囲気、空気感がいいのも継続して活動をしようと思う気持ちにつながっていいます。

③ あくまでも子ども会での活動をメインに今まで活動してました。
地元厚木市や神奈川県には、公立の宿泊施設があり、そこで行われる事業もあることを実はここ最近知ったので、カタチはどうであれ、子どもたちと関わる活動をしていけたらと思います。
少子化に負けず継続して事業が行われる事を願いつつ、機会があれば自分も参加したいなと思います。

④ 少子化で衰退しているのが残念ではありますが、子ども会だからこそ企画できたり体験できたりすることもあると思います。
消滅することなく、いつまでも続いてほしいと思います。

（厚木市出身　ゆうくん）

番外編：地元の若者と歩む

戦後まもなく、子どもを健やかに育てることを目的に生まれた子ども会は、近年減少の一途をたどっています。2023年には、自治会や小学校区ごとの「単位子ども会」は、ピーク時の３分の１となり、全国で5万3000余りとなりました。
全国子ども会連合会は、少子化が進み、共働き世帯が増え、子ども会の運営を担う保護者の負担が増し、担い手不足に陥っていること、コロナ禍で活動が制限されたことがさらに「子ども会離れ」に拍車をかけたと分析しています。

同じく地域で子どもを支える枠組みとして、自治会やPTA、各種保護者会などでも、それぞれが担い手不足という課題を同様に抱えている現在、互いを補い合うべく、研修などでも相互に参加し合いながら、「地域」を再構築するタイミングになりつつあるのかもしれません。

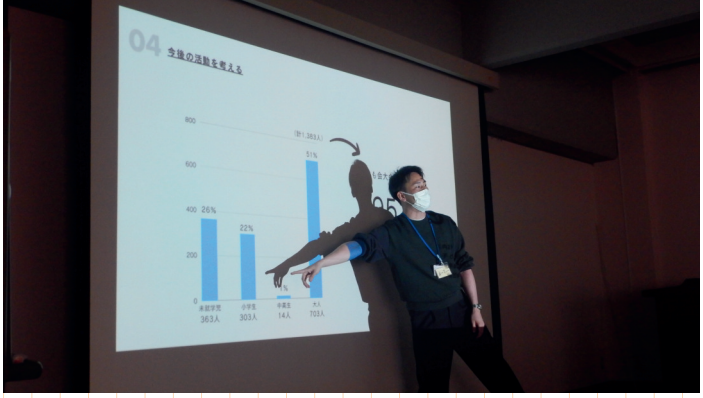
社会全般で、単発のアルバイトが流行しているように、学校行事なども単発のボランティアで運営する地域が増えてきました。この流れは、おそらく今後も加速していくことになるでしょう。

子ども会について全国に目を向けると、例えば保護者ではなく大学生ボランティアが運営していたり、従来の自治会単位ではなくマンション単位で結成されていたりと新たな形も模索されています。 県内でも、「活動事例」にみられるように、市町村の青少年主管課がボランティアとともに運営を支援しながら活動する地域もあります。

子ども会の持続可能性を考えるとき、今後は保護者以外の若者の関わりが鍵になりそうです。すなわち、若者が何を望むのか、どんな魅力を感じているのかを感じ取ることのできる、コーディネーターの出現が多くの地域で待たれています。

（事務局職員　長南 悠太）

エディターズ
ノート
数値に表れない価値



数値で示すと一見説得力があるが…（イベントボランティアセミナーより）

■　成長の瞬間

解けなかった算数の問題が解けるようになったり、少しずつ大きくなる手だったり、公園で他の子に優しくできる瞬間だったり、ふいに親に感謝を伝えたり…。

注視しなければ見逃してしまうような、子どもの成長の場面に立ち会えることの幸せは何にも代えがたいものです。

■　「評価」という壁

学校生活に目を向けると、授業で新しい漢字が書けるようになったり、友達をつくったり、仲直りする方法を考えたりと成長の瞬間がたくさんあります。それらを見守り、時には「支援」することが先生の役割です。一方で、その成長を数値や言葉で「評価」することも役割の一つです。

「評価」について少し考えてみましょう。平成29、30年に、幼稚園や小学校、中学校、高等学校の学習指導要領の改訂がありました。アクティブ・ラーニングという考え方が求められ、世間的にも広く使われるようになりました。直訳は、「活動的な学び」ですが、これは「話し合いや発表が多いこと」ではありません。「子どもたちの頭の中が活動的に働いているか」が重要であり、発言や行動などで表出しないものも内包します。

しかしながら、頭の中が活動的かどうかを見取ることは、極めて困難です。学校のテストで、紙面に書かれた解答がその子の思考のすべてではないように、頭の中で考えていることは直接他者にはわかりません。答えに至るまでの過程、その紆余曲折に隠れた成長を含めてより正しい評価につながるでしょう。
一方で子どもの中には、成績や評価に固執してしまい自分を見失う子も少なくありません。

「あまり人前に立って話すことが得意でない自分はダメなんじゃないか…」、「学校の成績が悪い自分は社会でやっていけないのではないか…」。
子どもたちのこのような心の動きを思うと、子どもたちを「評価」するという役割が、成長、ひいては「支援」することの障壁になり得るのではないかと考えてしまいます。これを解消すべく、学校現場では、その手段を今も模索し、努力し続けています。

■　成長に寄り添う情熱

ここまでは子ども個人の評価について考えてきましたが、組織の評価に視点を広げてみましょう。前述のとおり、子どもの成長を正しく評価することは非常に難しいものです。言い換えれば、教育や支援の成果も非常に見えづらいということです。

この章にあったユースサポーターの記事の中で、次のような発言がありました。
「子ども会は会員数が減少傾向にありますが子ども会のいいところは残っています」、「子ども会活動が縮小してしまうことに危機感を覚えている」…。

現在、全国的に子ども会の会員数は減少傾向にあります。各地域の子ども会はなくなり、市町村によってはジュニア・リーダーがおらず、休会しているところも少なくありません。ここだけ数値で切り取れば、成果が芳しくないと言わざるを得ないかもしれません。しかし、これだけでは、正しい「評価」とは言い切れないのではないでしょうか。これも一つの結果として受け止めるべきではありますが、この資料にあるような、紆余曲折に隠れた活動の成果に目を向けてみたいものです。

私は、県立青少年センター指導者育成課の職員として、ジュニア・リーダーやユース・リーダーと関わってきました。彼らは子ども会活動が世間的に下火になってきていることを知りながらも、現場で力強く活動しています。そのモチベーションとして共通しているのは、イベントに参加してくれる子どもたちの笑顔です。普段は遊園地でもらうバルーンが自分でつくれるようになったり、キャンプファイヤーの楽しさを体験したり、人と関わることの嬉しさを知ったり…。注視しなければ見逃してしまうような、子どもたちの成長の場面を彼らは見届けることができます。彼らは子ども会を通じた自分たちの活動が、子どもたちの、地域の、役に立っているのだと信じています。

この記事を通して、子ども会という看板を背負った若者が、地域の子どもたちのために懸命に取り組んでいる姿が、同じ世代の若者に前向きに評価されることを願います。
子どもの成長のそばに、若いリーダーの笑顔があり続けますように。

（事務局職員　山西 康介）